

授業科目名	専門教養・国際協力論 (英: Global Cooperation in Medicine)		
対象学年	1年生	単位	2単位
科目責任者	えぼしだ あきら 烏帽子田 彰	所属	公衆衛生学 (内線 5167)
		メール	duck@hiroshima-u.ac.jp
授業方法	講義中心、ディスカッション、学生の発表、ワークショップ		
概要	国際人としての教養を備え、健康や疾病に関する国際的視野を持ち、国際社会の一員かつ医療人としてどのように将来活動できるかについて、各専門分野で活躍する講師陣による講義と、学生のグループワークや発表を通して理解を深める。		
到達目標	<p>一般目標</p> <ol style="list-style-type: none"> 1. 健康・医療を介して国際的視点を学ぶ [“貧困 (poverty)” の対極にある“正義 (justice)” が社会・国家等を発展させること等] 2. 医学・医療以外の様々な国際協力との共通性について認識を深める 3. 現場主義の実践行動主義の原則を踏まえ、実働する医師養成を狙いとする。 4. 何らかの形 (立場) で国際協力の国際貢献を担う医師を養成する。 <p>行動目標</p> <p>患者の文化的背景を尊重し、英語をはじめとした異なる言語に対応することができる。</p> <p>地域医療の中での国際化を把握し、価値観の多様性を尊重した医療の実践に配慮することができる。</p> <p>保健、医療に関する国際的課題を理解し、説明できる。</p> <p>日本の医療の特徴を理解し、国際社会への貢献の意義を理解している。</p> <p>医療に関わる国際協力の重要性を理解し、仕組みを説明できる。</p> <p>世界の保健・医療問題 (母子保健、感染症、非感染性疾患 (non-communicable diseases <NCD>)、UHC (Universal Health Coverage)、保健システム (医療制度)、保健関連SDG (Sustainable Development Goals)) を概説できる。</p> <p>国際保健・医療協力 (国際連合 (United Nations <UN>)、世界保健機関 (World Health Organization <WHO>)、国際労働機関 (International Labour Organization <ILO>)、国連合同エイズ計画 (The Joint United Nations Programme on HIV/AIDS <UNAIDS>)、世界エイズ・結核・マラリア対策基金 (The Global Fund to Fight AIDS, Tuberculosis and Malaria <GF>)、GAVIアライアンス (The Global Alliance for Vaccines and Immunization <GAVI>)、国際協力機構 (Japan International Cooperation Agency <JICA>)、政府開発援助 (Official Development Assistance <ODA>)、非政府組織 (Non-Governmental Organization <NGO>)) を列挙し、概説でき</p> <p>国際保健・医療協力の現場における文化的な摩擦について、文脈に応じた課題を設定して、解決案を提案できる。</p>		

<p>講義日程</p>	<p>第1回/第2回 国際協力実践的思考 ワークショップ1：烏帽子田 彰・鹿嶋 小緒里・土橋 西紀 第3回 武力紛争後の社会における平和構築と医療協力：山根 達郎（平和共生講座 准教授） 第4回 国際協力実践的思考 ワークショップ2：烏帽子田彰・鹿嶋小緒里・土橋西紀 第5回 国際防疫対策における国際協力 笠松 美恵（厚生労働省 広島検疫所 所長） 第6回 広島大学医学部における国際交流・国際協力：栗栖 薫（脳神経外科学 教授） 第7回 保健医療行政における国際協力：土居 弘幸（岡山大学 疫学衛生学教室 教授） 第8回 国際協力実践的思考 ワークショップ3：烏帽子田彰・鹿嶋小緒里・土橋西紀 第9回 開発途上国における国際保健の実例（ANT-Hiroshima代表） 第10回 本学の学生が行う国際協力：烏帽子田 彰・鹿嶋 小緒里・土橋 西紀 第11回/第12回 全球化する環境問題と日本の国際貢献：白井 義人（九州工業大学／マレーシアプトラ大学 教授） 第13回/第14回 国際協力実践的思考 ワークショップ4：烏帽子田 彰・鹿嶋 小緒里・土橋 西紀 第15回/第16回 国際協力論総括：烏帽子田 彰・鹿嶋 小緒里・土橋 西紀 （※ 講義順番は一部変更になる予定）</p>
<p>評価項目</p>	<p>到達目標の達成度 （基本的理解と知識の応用）</p>
<p>評価法</p>	<p>各講義ごとの小テスト並びに課題レポート（ワークショップでの発表を含む）、および講義の受講態度等により総合的に判断する。なお、講義中の積極的な質疑や姿勢などを重視する。（必ず個々に対し発言・応答を課すこととする） 継続的な授業への参加が重要であり、授業への参加状況を勘案して毎回提出されるレポート（30%）、ワークショップの課題発表（20%）、最終課題等（30%）、および授業への参加・積極性等（20%）の結果を評価する。基本的には絶対基準で60点以上を合格とするが、得点率60%未満の受験者が総受験者の10%を超えた場合には平均点－1.5×標準偏差を合格基準とする。 【重要事項】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 小テストは全課題の提出が必須である。 ・ なお、追試（再試もしくは再レポート）は1回のみ実施する。 ・ 毎講義出席をとる。 ・ 3分の2以上の出席がない場合は本試験の受験資格を認めない。
<p>履修上の注意 アドバイス</p>	<p>講義形式は講義中心とし、板書の書き取り等からの脱却による「聞いて、見て、考える授業」として構成されている。各回の授業後にレポートを提出します。 原則として予習を踏まえて催講する。 （事前に配布した資料等から、次回の授業範囲を予習すること）</p>
<p>推奨参考書</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・ 「国際保健医療学」第3版 日本国際保健医療学会（編集） 杏林書院 ・ 「Social Determinants of Health」2版 M. G. Marmot（編集）Oxford University Press